



第 51 回 (平成 22 年 7 月 14 日) 定例会の研究発表

「石狩低地帯～手稲区の土質」について

西区八軒 條野雄一氏



條野氏がお住まいの八軒に、活断層があると聞き及び、氏が地盤を調べてみることにしました。街づくりセンターから某社作製の「札幌地盤図」を借り受け、更に研究を進めた成果を発表下さいました。

発表内容より

約 2 万年～1 万 8 千年前の最終氷期のもっとも寒冷した時には、海面は現在より 85m 以上下がっていたが、1 万年前より急速な温暖化により、海面が上昇。約 5～6 千年前の縄文海進最盛期には、現海面より 3m 前後高かった。

第 4 紀層の地質区分 …… 沖積層 (約 1 万年前～現在の海面上昇に伴う更新世の地形を埋め立てた土砂) と洪積層 (更新世・約 170 万年～約 1 万年までの期間)

JR 函館本線を境として北側の低地・南側の扇状地山地に 2 分される。

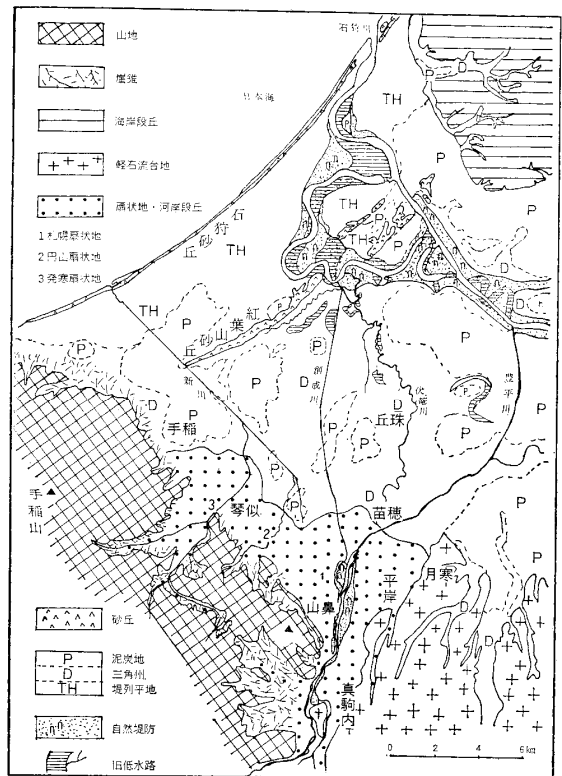
手稲の土質は、泥炭 (湿地帯の草類等の堆積物)、海成粘土 (海底に堆積してきた粘土)、粘土 (極めて微細な風化物の粒からなる可塑性と粘性に富んだ物質)、礫 (粒径 2mm 以上の石片)、砂 (粒径 2mm 未満の石片)、シルト (砂と粘土との中間の粒径を持つ砕石物) から成る。

札幌市を東西南北 3km 毎にグリッド状にボーリングした結果に基づいた「地質・土質断面図」では、会員の皆さんの居住地付近の状況はどうか? と盛り上がりを見せていました。

付則 …… 札幌というまちから

新第三紀の終わりころ (約 200 万年前) 火山活動が活発になり、安山岩質の溶岩が流れ出し溶岩台地を形成。その後浸食が進み、起伏に富む山々となる (手稲山、藻岩山、円山)。その麓には急斜面から落下した岩くずから成る崖錐が見られる。

札幌市と石狩市の境界付近には古砂丘 = 紅葉山砂丘 (縄文



札幌と周辺地域の地形 (石狩沖積低地地質図より作成)

次回の予定

次回 (9 月 8 日) は、地質研究所 所長藤本和徳氏の講演「札幌の市街地西部山麓にあった温泉～瀧の沢温泉、藤の湯、軽川温泉～」、茂内義雄会員の研究発表「年表に見える明治の手稲」2 回目を予定しております。

【お願い】

当日は、「手稲歴史年表」をご持参ください。

末期形成) が見られる。現在の海岸線とほぼ並行しており、海退による産物と考えられる。砂丘は現海岸線の 5～6km 内側に有り、前田から生振を経て美登位まで

の 15km に亘って細長く分布。紅葉山砂丘と札幌扇状地の扇端部の間に湿地帯の泥炭地・三角州低地が見られるのは、砂丘が排水の妨害をしたことも一因である。(文責: 大村弘子)

「年表に見える明治の手稲」について

曙 茂内義雄氏



今年作成された歴史年表の発刊は、当会にとっては、おおきな事業でしたがこれを成し遂げたことは、手稲区民はもとより札幌市民にとっても輝かしい業績として後世に誇れる事業であったと云っても過言ではありません。

今回の発表はこの年表の作成の過程から時代々々の背景や開拓の苦労をされた先人の取り組んできた内容などを改めて現代人からみた感じ方などを示されたものと思います。

その内容について講話を拝聴した会員として、その取り組まれた姿勢の真摯さや情熱がひしひしと伝わってきて大きな感動を覚えました。講話の初めに明治編とはいえ、また手稲の事柄に触れてゆくにあたり避けて通れない具象としての幕末から明治維新における箱館戦争についても若干の考察を披見されながら資料に従って説明に入られました。

『手稲歴史年表』に見る手稲事始め 明治編 の資料により若干の幕末時代の北海道の位置づけや戊辰戦争における箱館戦争、その後の開拓使の動向についての内容から入っていった。安政 2 年幕府は蝦夷地を再直轄する。

同 4 年山岡精次郎が箱館奉行の命令により蝦夷地跋涉にあたった。そして農夫を募り、ホシオキやハッサムの開墾に従事させるが、後にこの開拓者達の大方は離散した。しかしホシオキには中嶋彦左衛門が入地し、在任頭取となった。その後ホシオキを中心に早山清太郎・高橋鞆負をはじめ慶応 3 年には中田儀右衛門が陸中から亀田経由で上手稲村に移住する等開墾に従事していった。そして明治 2 年開拓使判官として、島義勇が銭函に入り役所を設けたが短期間で更迭され、その後岩村判官が小樽に仮役所を設置した。明治 4～5 年にかけて大きな移住の動きとして白石城主片倉小十郎の家臣団が上手稲に入り住地を手稲村と称した。

明治 6 年手稲村が上手稲・下手稲の両村に分かれ、下手稲村に菅野格が副戸長に任命された。明治 9 年札幌農学校が開校され、教頭としてクラーク博士が赴任され、10 年一期生を連れて手稲山に登山し、多くの貴重な植物などを採取された。

戸長制度が明治 10 年に設けられたと「手稲村史原稿」にあるが 12 年という説もあり、このあたりはなお精査する必要があるのではないかと考えていると説明された。

明治 11 年下手稲村に札幌神社搖拝所が創建されたのちに手稲神社へと発展する。それまで地元では黒住教という神道の宗派が存在していた。

明治 12 年武士出身者の就業対策として函館を中心に北海道開進会社が創設された。しかし、長くは続かなかった。その事務所建家に下手稲小学校が開校されている。明治 13 年には小樽・幌内間に道内初の鉄道建設が開始された。

同年手稲地区での本格的な開拓団として、山口県岩国から宮崎源次右衛門が移住伺書を提出、翌年 2 人で来道し明治 15 年下手稲村を分割して、山口村が新設され、同村の開祖といわれた。その間、トノサマバツタの来襲という事件があり、また郵便局の前身である切手売下所が下手稲村に設置された。

明治 15 年開拓使の時代が終わり道内は札幌・函館・根室の三県が置かれた。

明治 19 年道庁時代となり岩村通俊が初代長官として任命された。

明治 21 年下手稲村の軽川に戸長役場が移転設立された。

以上、明治編の途中で講座時間切れとなり次回に持ち越された。

今回の講話を拝聴するにあたり「手稲歴史年表」に見る手稲事始め 明治編 として、実に精密で時系列が判り易く整理された資料をレジュームとして提示され、誰もが年表への関心をより強く持てる様に丁寧に作成されたことに心から感謝したいと思ったのは私だけではないのではないかと考えています。

[文責：中山恒雄]

お詫び

第 30 号会報 (平 22.6.9) 中の記述を次のように訂正致します。

(誤)昭和 5 年 7 月 (正)大正 11 年 (*みどり亭に宿泊は未確認情報でした)

(誤)箕輪町長 (正)箕輪町長 (文責 釣本峰雄)